



マッシュルームハウスの集落

性産業に従事する女の子たち



JICA専門家
(HIV/AIDS及び結核対策プログラムコーディネーター)
座間 智子

ザンビアの春は、9月になると一斉にジャカランダの紫色の花が咲き誇り、日本の桜並木のような風景で心和みます。そして、今は火炎樹の花が真っ赤に咲き始め、本格的な夏の到来です。この季節は、ザンビアの一年の中でも最も活気に満ちた時期です。

内陸国に位置するザンビアは、多くの物資を近隣国からの輸送に頼っています。特に南アフリカとの自由貿易が開始されてからは、長距離トラックが主な輸送手段となり、町には南アフリカ製の食料、電化製品などがあふれています。15年前のザンビアと比べると、何でも手に入るようになり、生活はとても便利になりました。今回は、そんなトラックが行き来するジンバブエとの国境の町を訪ねました。その小さな町は、税関の事務所と警察、小学校と、マッシュルームハウスといわれる茅葺きの集落が点在しているだけです。税関の通過手続きを待っている長距離トラックが街道を埋め尽くし、時には1週間もかかる手続きの順番を待っています。

町の活気とは裏腹に、ここには100人ともいわれる性産業に従事している女の子たちがパートナーを探しに集まってきます。

ビクトリアは、24歳、2人の子供の母親です。夜、子供たちを妹に預け、着飾って町に出ます。町の酒屋で今晚のパートナーを探し、朝まで酒屋で費やすこともしばしば。「パートナー探しは、競争率が激しくて難しいわ」と屈託ない笑顔で語ります。

35歳のクリスティナーは、3人の子供を育てながら、この仕事をしています。「夫に先立たれて、子供を育てるためにはこの方法しかなかったの」「ほかに仕事があるなら、いつでも職を変えたいわ...でも、どこにあるかしら」

自国産業の少ないこの国では、簡単に働けるようなところはなく、小学校・中学校しか出ていない彼女らに、定期的な収入をもたらす手段として性産業に走るの、一般的なことになってしまうのです。

「子供たちや親は、あなたたちの仕事のことを知っているの?」と聞いてみました。「ええ。知っているわ。子供は出かける前に、今日は何か持ってきてね。と言うくらいだから」とクリスティナーは淡々と語り続けます。ビクトリアは、「私の両親は亡くなって、いないから...でも、町中の人々が私たちを見ると指をさして差別をするわ。でも、私は気にしなくなったわ」。そばで聞いていた、19歳になるジャッキーが、「でも、時々、一人もお客が取れないで、夜道を一人で歩いて帰ってくると、なぜ私はこんなことをして生きているんだろうと涙が止まらなくなることもある」と、ぼつんと声を漏らしました。

「この仕事でなくてほかにどんなことをしたい?」と、思い切って聞いてみました。みんなの目がぱっと輝きました。「ロウケツ染め」「ヘアドレッサーの勉強がしたい」「ケイタリングの学校へ行って、レストランで働きたい」それは皆若い女の子です。それぞれにやりたいことは、他国の同年代の女性と同じようにいっぱいあるのでしょうか。

性産業に従事することは、彼女たちだけの問題ではなく、この国全体の社会的な問題です。低経済成長による失業、そして貧困、HIV/AIDSがもたらした孤児の増加、性に開放的な文化的社会背景等それらの問題が複雑に絡み合い、そのしわ寄せが彼女たちに、またその子供たちまで及んでいます。

帰りがけ、彼女たちは私に「こう見えても私たち、Peer Educator*なのよ。HIVや性感染症に感染しないようコンドームの使い方を仲間に教えて歩いているの」と得意げに言いながら、バックの中を見せてくれました。そこには教育用のパンフレットが入っていました。

火炎樹の燃えるような花の色と同じ真っ赤なドレスに身を包んだ彼女の、いくつもの顔を垣間見た一瞬でした。

*Peer Educator : 年齢や職業を同じくする者を対象とする支援